



Title	活動の経緯
Author(s)	高安, 啓介
Citation	形象. 2016, 1, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

活動の経緯

形象論研究会は、ドイツ系美学にみられる形象論について検討する少人数の勉強会として始まり、イメージ理論の可能性について議論をおこなう研究会として活動をおこなってきた。二〇一一年に愛媛大学において第一回目の会合を開いて以降、定期的に重ねてきた研究会は、二〇一六年三月の会合で一回目を数えることとなる。当初からのメンバーは、原千史（福山大学）、三木順子（京都工芸繊維大学）、柿木伸之（広島市立大学）、高安啓介（愛媛大学）の四名である。研究会には、大学院生が参加することもあり、年長の研究者と議論するよい機会にもなってきたように思われる。

形象論研究会がこれまで重点を置いてきたのは、ベンヤミンおよびアドルノにみられる形象思想と、ゴットフリート・ベームを中心とした形象理論であり、両者に共通する問題として、形象の否定がいかなる現象としてあらわれるのか、形

象の否定がいかなる理由でおこなわれるのが、繰り返し問われてきた。柿木は、二〇一四年に上梓した『ベンヤミンの言語哲学』（平凡社）においてベンヤミンの形象理解にも論及しているが、本号所収の論文ではベンヤミンの形象論をさらに浮かび上がらせようと試みている。高安は、二〇一二年の美学会全国大会において「アドルノ美学における形象の問題」と題する研究発表をおこない、本号所収の論文においてアドルノの形象論をより詳しく描き出そうと試みている。原は同じ二〇一二年の日本独文学会中国四国支部学会での研究発表「仮象の批判と救済——Th・W・アドルノ『美学理論』をめぐって」において、仮象に対するアドルノのアンヴィヴァレントな姿勢を浮き彫りにするとともに、批判理論を継承するシュヴェッペンハイザー父子の形象論を本号で紹介している。三木は、二〇一五年の美学会西部会での「アイコン的転回

の射程——〈素描 Zeichnung〉と〈身振り Geste〉に基づく「考察」と題する発表において、形象の自己呈示力について論じ、本号にはイメージ学の嚆矢の一つに数えられるベームの論考の翻訳を寄せている。

形象論研究会は、当初よりドイツ語の形象（ビルト）の意味について問うてきたが、第四回目の研究会においてアメリカ現代美術を専門とする加治屋健司氏に話していただいたのを一契機として、英米系のイメージ論にたいする関心を強めており、さらにまた、ディディエ・ユベルマンなどフランス現代思想におけるイメージ論の動向にも注目してきた。現在では、欧米のイメージ論を横断する問題について考察しようとしている。また以上のような理論上の関心から、写真・映像・演劇・音楽・建築など、各芸術ジャンルに固有の問題を持ち寄って、議論をおこなうこともあった。そのとき近現代の芸術のうちでもイメージの存立をおびやかすような表現活動にとくに関心が向いたが、その理由は、イメージの意味がそこで根本から問われるからである。第六回目の会合は、ドラマトゥルクの林立騎氏の講演会と合流し、田中均氏（大阪大学）の司会のもとで現代演劇の問題について議論をおこなった。そのほかにも、研究会メンバーは各々の関心領域におい

て形象の問題をとらえようとしてきた。柿木は、現代作曲家の細川俊夫の諸作品の批評をとおして音楽形象のありかたを問うてきた。三木は、伊勢神宮の式年遷宮における否定の契機について論じてきた。高安は、二〇一五年に出版された『近代デザインの美学』（みすず書房）において、二〇世紀の各デザイン分野にみられた形象批判の意味について考察をおこなった。

形象論研究会は、今後もひきつづき現代美学におけるイメージ理論の研究会として、各言語でなされている議論の比較をおこない、研究者どうしの交流をうながしたいと考えている。さらにまた、各芸術において起こっている問題の検討をとおして、実際の芸術活動との接点をさぐるうとしている。この研究会に興味をもたれたかたは、上記のメンバーに直接お問い合わせいただければ幸いである。

〔高安啓介〕